

集団的自衛権というホトトギスの卵

表題と写真は、『世界』8月号の石川健治・東大教授（憲法学）へのインタビューである。副題は『「非立憲」政府によるクーデターが起きた』である。示唆に富む指摘が多く、最初と最後だけでも紹介しておきたい。

ホトトギスの卵のたとえ話が思い浮かびます。ホトトギスはウグイスの巣に卵を産み付け、ウグイスの母親は自分の産んだ卵と差別しないで温めます。しかし、孵化に要する日数が短いホトトギスの卵の方が、先にひなになり、だんだんと大きくなってその巣を独占し、やがてウグイスの卵を巣の外に押し出して、地面に落としてしまうのです。戦後、旧文部省が出した『民主主義』という本の中に出てくるたとえ話です。

卵をこっそり産み、結局は巣を乗っ取ってしまう。集団的自衛権の問題はこのたとえにふさわしいと思います。昨年7月1日に、政府は、集団的自衛権を小さく産み落とすことに成功しました。個別的自衛権行使の量的拡大にすぎないかのような体裁に見せて、実際には質的に異なるものを持ち込んだのです。----- 集団的自衛権という産み付けられた卵は、ウグイスの子だと内閣法制局や公明党がどれほど言い繕ってみても、やはり着実にホトトギスの子として育てている。たとえば安全保障法制の議論をしてみると、何かといえ、地球の果てまで自衛隊が行ける話になってしまう。国内向けにはウグイスの子として育ててきたものの、やはりそれはホトトギスの卵だったのであって、大きく育ててウグイスの巣を占領しつつあります。そのことが、次第に明らかになってきた1年間であったようにおもいます。

明治以来の近代日本が目指してきた本筋は、あくまで立憲主義であり、日本の中枢部のエリートが立憲主義を支持してきたことは間違いのないことです。これに対して、安保法制を数の力で押し切ろうという選択は、多数者による専制であって、それは、立憲主義の仇敵である、専制主義に与することです。---- 専制主義により押し切られることになれば、日本国は立憲民主制から絶対民主制に移行することになります。相撲にたとえれば、もう土俵の特俵まで来ています。ここで踏みとどまることが日本の繁栄にとっては大事で、まずリセットすること（安保法制の法案を廃案にすること）が必要ですね。この問題意識をどこまで多くの人に共有してもらえるかどうか、暑い夏になるでしょう。

---- 最後は政府が強行採決という無理押しをするかもしれません。しかし、「理」はこちら側にあると思っています。
(2015年7月20日)

